4. ^{99m}Tc-HMPAO と ^{123}I-IMP による2核種同時収集脳 SPECT の基礎的臨床的検討

井上　武　棚田　修二　菅原　敬文
村瀬　研也　中田　茂　三木　均
田中　伸司　木村　良子　濱本　研
（愛媛大・放）

［目的］ 中枢神経疾患患者において，同一病態，同一部位での脳血流量測定および，エネルギー代謝測定や神経受容体分布測定を目的として，^{99m}Tc と ^{123}I による2核種同時収集脳 SPECT でのイメージの分離能と定量的評価の可能性について検討した．

［方法］ 1) 基礎的検討：^{99m}Tc と ^{123}I の2核種同時収集可能な3種類のエネルギーウィンドウを設定し，核医学用各種ファントムを用いて均一性，直線性，空間分解能，イメージ分離能について検討した．2) 臨床的検討：脳腫瘍患者に ^{99m}Tc-HMPAO と ^{123}I-IMP の2核種同時収集を施行し，イメージ分離能について検討した．

［結果］ 均一性，直線性，空間分解能ともに2核種同時収集法で良好な結果を得た．臨床例でもイメージの分離は良好であった．

5. ^{123}I-IMP による脳血流定量が有用であった神経ベーチェット病の1例

佐藤　修平　竹田　芳弘　郷原　英夫
巻幡　栄一　赤木　史郎　栄　勝美
河野　良寛　清水　光春　木本　真
平木　祥夫　（岡山大・放）

症例は43歳男性．主訴は性格変化．入院時，舌先端部のアフタを認めた．末梢血で CRP, IgG, 髄液中で細胞，蛋白，IgG の増加を認め，また他の膠原病を疑わせる抗核抗体などの上昇なく，神経ベーチェット病と診断された．

MRI では異常を認めなかった．入院1か月後に施行された ^{123}I-IMP による SPECT 検査では，相対画像では異常を認めなかったが，定量画像では瀰漫性に脳血流の低下を認めた．ステロイドのパルス療法などにより症状が軽快してきた半年後の再検査では脳血流の改善を認め，^{123}I-IMP による脳血流定量検査は神経ベーチェット病の診断および治療効果判定に有用であると思われた．

6. 結節性甲状腺腫における ^{201}Tl シンチグラフィの臨床的有用性に関する再検討

川崎　幸子　三谷　昌弘　西山　佳宏
余田みどり　松野　慎介　児島　完治
高島　均　田邉　正忠　（香川医大・放）

結節性甲状腺腫65症例87病変の ^{201}Tl シンチグラフィの診断能を再検討した．検出可能最小径は 1.0 cm であった．^{201}Tl の集積は初期像 (E)，遅延像 (D)，集積パターン E(+)D(+), E(+)D(−) とも腫瘤径との間に関係は認められなかった．局在部位と集積パターンにも相関は認めなかった．washout の遅い E(+)D(+) を呈したものは乳頭癌 66%，濾胞癌 100%，悪性リンパ腫 100%，濾胞腺腫 42% であった．悪性腫瘤の診断基準を E(+)D(+) とするとその sensitivity 71%，specificity 74%，accuracy 72% であった．慢性甲状腺炎の合併によるタリウム washout の遅延はシンチグラム上の甲状腺腫のタリウムの集積パターンに影響を認めなかった．

7. 急性化膿性甲状腺炎の2症例

松原伸一郎　山本　道教　三森　天人
（姫路赤十字病院・放）
内藤　好宏　中島　智子　古川　勝朗
（同・耳鼻）
白神かおり　（日本鋼管福山病院・耳鼻）
竹田　芳弘　平木　祥夫　（岡山大・放）

急性化膿性甲状腺炎は比較的稀な疾患であるが，下咽頭梨状窩瘻がその主な感染経路であるとされて以来，多くの報告が見られるようになった．われわれは2例の急性化膿性甲状腺炎を経験し，興味あるシンチグラフィの知見を得たので報告する．

1. Tc イメージでは，炎症あるいはそれによる甲状腺組織の破壊された部位に一致して欠損像が見られた．これは触診や CT, エコーでとらえられる変化によく一致した．

2. Tl イメージでは特に特異な所見は得られなかった．

Presented by Medical*Online